１　『教　育　目　標』　　令和５年度

（１）本校の教育目標

新しい時代の要請に即応した教育活動の創造に努め、本校の恵まれた特色ある自然環境を生かしながら、すぐれた創造性（知）、豊かな人間性（徳）、たくましい実践力（体）を身に付けた、未来の創り手となる児童を育成する。

【めざす児童像】

〇げんきな子

自他の健康や安全に気を付け、進んで体を鍛え、笑顔いっぱいに活動できる子

〇がんばる子

自分が定めた目標に向け、最後まで粘り強く取り組むことができる子

〇すなおな子

豊かな感性や思いやりの心をもち、友達や学校、地域に進んで貢献できる子

〇くふうする子

自ら問題を発見し、よい方法や手段を考えながら自分で解決できる子

（２）経営方針

①　実際の生活に生きて働く「知識や技能」の習得を重視し、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」を身に付けるとともに、そうした学びを生活や自己の生き方に生かすことのできる児童を育てる。

②　家庭や地域の願いを受け止め、連携を図りながら、小規模校の特徴を生かし、温かい人間関係の中で、人への思いやりや自らの命を大切にするとともに、多様な人間の存在を尊重して生きることのできる心豊かな児童を育てる。

③　礼儀や礼節を重んじ、規律ある生活及び学習習慣を身に付けるとともに、自己の生活や環境を豊かにするために、確かな知識と的確な判断力をもって、自ら考え主体的に行動できる実践力のある児童を育てる。

④　「一人を粗末にするとき、教育はその光を失う」の理念のもと、人を育てるという崇高な使命を自覚し、教職員一人一人が個性や持ち味を生かしながら、人間性・専門性・指導性を共に磨き合うことで自己を高め、信頼される学校づくりを推進する。

（３）本年度の重点努力目標　「学校も竜谷っ子も　ピッカピカ」

全校の児童がピッカピカに輝ける場面を創出するとともに、児童一人一人の輝いた姿を認め、賞賛・評価する。

そして、全校の児童・職員が常に「あ（あいさつ）い（命）う（運動）え（笑顔）お（思いやり）か（感謝）」を意識し、実践できるようにすることで基本的な生活習慣や道徳意識を涵養する。また、このことは家庭にも協力をお願いする。

①すぐれた創造性（知）を育てる

・ＩＣＴなどを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」を保障し、子どもたちの学習意欲を高めるようにする。

・学習過程にチーム学習を取り入れ、誰一人取り残さない学びを推進する。

・単元や授業の「導入」を工夫する。学習課題に対する児童の興味や関心を十分に引き出し、自ら学ぶ主体的な学びを促す。
・単元や授業の序盤に「学習を見通す」場面を設定する。学習課題に対して問題意識を明確に持たせることで、学びの方向を定める。
・単元や授業の終盤に「学習を見直す」場面を設定する。学習内容の振り返りを行うことで、学びの定着を図る。
・児童が「関わり合いながら学ぶ」場面を意図的に設定する。言語活動を充実させることで、対話的な問題解決の過程を重視する。
・教師が ICT を積極的に活用し、効果的かつ効率的な授業を実現させる。また、児童が ICT を学びに利用することで、情報を豊かに活用できるようにする。

②豊かな人間性（徳）を育てる
・道徳の授業を工夫改善する。人との関わり方や個の多様性、自己の生き方についての考えを深め、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。
・地域の教育力を教育活動に積極的に生かしていく。地域に学び、主体的に地域と関わることで、ふるさと竜谷への誇りと愛着がもてるようにする。
・縦割り活動の充実を図る。異学年が交流できる機会を効果的に位置付けることで、円滑な人間関係の在り方や、思いやりの心を育む。
・児童の声に真摯に耳を傾ける。個の特性を理解し、躓きや悩みに寄り添った指導を行うことで、どの児童も明るく登校できるようにする。
・保護者や地域の声に謙虚に耳を傾ける。保護者の願いと地域の期待を常に捉えられるよう情報の収集と発信に努め、教育活動に反映させる。

③たくましい実践力（体）を育てる
・代表委員会を中心とした委員会活動や縦割り活動、係活動等において、児童が主体的に行動する力を育てる。
・学校行事や学級活動を充実させる。児童が自主的に企画運営し活躍できる場面を増やすことで、役割に責任をもたせる。
・体育の授業や体育的行事、部活動において心身を鍛え、自ら運動に取り組む態度の育成と体力の向上を図る。
・挨拶や返事、時間を意識したけじめある生活、清掃活動の充実など、規律ある生活習慣を定着させる。
・防災について、正しい知識、的確な判断力、場に応じた行動、自ら危険回避できる実践力を育む。

（４）信頼される教師と学校であるために

「一人を粗末にするとき、教育はその光を失う」の理念のもと、教職員がすべての児童に対して、共感的に理解するとともに、自己決定を促し、全児童の自己有用感を育む。

さらに、「何を言ったかではなく、誰が言ったか。人は好きな人から学ぶ」を念頭に、児童・家庭・地域から好感・信頼を寄せられる教師集団をつくる。このことが信頼される学校へとつながっていく。